様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25 年 5　月 27　日現在

機関番号：24403
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010　～　2012
課題番号：22530608
研究課題名（和文）ピアサポート実践における障害当事者のアイデンティティ形成とコンフリクト
研究課題名（英文）Conflicts observed in disabled persons in the process of their identity formation through peer support practice
研究代表者
児島　亜紀子（KOJIMA　AKIKO）
大阪府立大学・人間社会学部・教授
研究者番号：40298401

研究成果の概要（和文）：本研究では、CIL のスタッフの中に潜在的なコンフリクトがあることが明らかになった。自らに課せられた「理想的な障害者」役割に違和感を覚える障害者スタッフもいれば、「理想的な介助者」であろうとして疲弊していく健常者スタッフもいた。しかしながら、これらのことは表だって語られることは少なく、それゆえに CIL におけるコンフリクトの存在はわかりにくい。コンフリクトを緩和していくためには、障害者／健常者という 2 項対立を見直し、両者間のコミュニケーションを活発化していくことが有効である。
研究成果の概要（英文）：This research reveals that the disabled and nondisabled members of the CIL staff develop inner conflicts while building their identity through peer support practice. A disabled staff member feels uncomfortable with the forced role of an ideal disabled person. A nondisabled member exhausts himself, playing the role of an ideal caregiver. However, they tend not to express their innermost feelings openly, thus keeping their conflicts latent. Facilitating active communication among all the staff members will be effective in alleviating their conflicts.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
２０１１年度	600,000	180,000	780,000
２０１２年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：社会福祉学
科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学
キーワード：障害当事者、CIL、コンフリクト、障害受容、アイデンティティ、介助者

１．研究開始当初の背景

障害当事者によるピアサポートの重要性が、わが国でも強調されるようになって 20 年以上が経過する。かつてわが国の障害者は、自らの人生における重要事項を決定する機会を奪われがちであった。しかしながら、障害者の自己決定を主張する運動の広がりと、アメリカで始まった自立生活運動の影響も相俟って、わが国においても障害者が運営主体となる事業が成立するに至る。本研究で取り上げる自立生活センター（以下、CIL という）は、かかる団体のひとつである。CIL は、運動体と事業体という二つの側面を有し、当事者こそが当事者に必要なものを最もよく提供できるという観点に立って、障害者の自立支援を行っている。

かつてインフォーマルな場面で CIL スタッフの語りを聞く機会が与えられた際、われ

われは以下の 2 つの点に疑問を抱いた。すなわち（ア）障害者と障害者をサポートする健常者スタッフの間に介助をめぐって葛藤が生じているのではないか、（イ）障害当事者間にある自立支援活動に対する意識のズレや相克によって、ピアサポート実践が妨げられることがあるのではないかという疑問である。特に、後者については、告発型の障害者運動を展開してきた当事者たちと、障害者としての自覚を特別持たずとも、ある程度サービスが安定して供給され、社会参加も可能な時代を過ごしてきた当事者たちとの間に、障害当事者としての役割や自立支援活動に対する考え方の違いが存在するのではないかと予測した。両者の考え方の違いがコンフリクトとなって現れ、ピアサポート実践を妨げていると予想したわれわれは、コンフリクトの実態を明らかにするべく、この研究を計画するに至った。また、コンフリクト状況の発生の背景には、当事者一人ひとりの「障害者としてのアイデンティティ」があると考え、コンフリクトに直面した障害当事者が、どのように「障害者としてのアイデンティティ」を形成してきたかも併せて検討することとした。

２．研究の目的

本研究の目的は、障害当事者による障害者支援、すなわちピアサポートに着目し、ピアサポート実践現場における当事者のコンフリクトの発生過程を明らかにすることである。実践現場として、わが国におけるピアサポートの先駆けともいえる CIL に焦点化する。本研究においては、インタビュー調査によって、CIL の障害者スタッフと健常者スタッフおよび障害者スタッフ間でどのようなコンフリクトが生じているかを明らかにするとともに、CIL における障害者のアイデンティティ形成と、スタッフのコンフリクトとの関係を考察する。

３．研究の方法

本研究では、まず文献研究において障害者・健常者のコンフリクト状況を分析する枠組みを導出する。ついで CIL において参与観察を行い、センターでアテンダント業務に従事する健常者スタッフと障害当事者の双方にインタビュー調査を実施する。また、センターで活動する別の障害当事者に、障害者同士のコンフリクト状況の実態およびアイデンティティ形成との関連を調べるため、インタビュー調査を行う。

４．研究成果

本研究で当初考えていた「告発型の障害者運動を展開してきた当事者たちと、障害者としての自覚を特別持たずとも、ある程度サービスが安定して供給され、社会参加も可能な時代を過ごしてきた当事者たちとの間との葛藤」については、残念ながら具体的なデータを得ることができなかった。しかしながら、障害者と障害者をサポートする健常者スタッフとの間に、介助をめぐるコンフリクトが潜在していることは確認できた。障害当事者にとって、介助に関するコンフリクトは、「障害受容」にかかわる問題として表出し、一方、介助者にとってのコンフリクトは、障害当事者とのコミュニケーションに起因しており、コミュニケーションの不在と歪みが、介助者に強いプレッシャーを与えていることが明らかになった。

（1）障害当事者の抱えるコンフリクト――その推移

CIL において、障害当事者のコンフリクトは、どのようにして発生するのだろうか。コンフリクト発生までの出来事と、本人の感情の推移は、おおむね以下のようにまとめられよう。①本人の力では容易に乗り越えがたい壁に遭遇したのち、CIL につながり、その理念に励まされる。②CIL の理念に共感し、その理念を体現すべく活動を始める。③活動するうちに自分自身にフィットしないものを感じはじめる。④何がどのようにフィットしないのか、その理由は何か、違和感の正体を掴もうと当事者が自己分析するなかで、障害者のロールモデルとして生きること＝障害受容の問題に逢着する。

①→②→③→④のプロセスを経ても、当事者が自分の思いを CIL のスタッフに打ち明け、その場で話し合いが持たれ、否定されることがなければ、ある程度コンフリクトは緩和され、当事者は CIL に留まることができる。

以下では、障害当事者がロールモデルを引き受けることのどこに違和感と困難を覚えるのかを、やや詳しく見ていくことにしたい。

（2）障害当事者のコンフリクトと障害受容

CIL の障害当事者スタッフが、「理想的な障害者像」を体現することにためらいを覚えるとすれば、何ゆえだろうか。本研究において、その理由が 2 点抽出された。1 つめは CIL の「障害受容」概念が、無条件で他者にも要請される性格を持つことであり、2 つめは当事者が「障害受容」できているか否かを判断する規準のひとつが、介助者を活発に利用できているかどうかにあること、であった。

あるインタビュイーは、CIL の理念に賛同しつつも、障害をありのまま受容することを、自分のみならず、健常者である他者にも要請することの違和感について次のように語った。

だって異質なもんやねんから異質な者同士、質が違うもの、特性が違うものを持ってる者

同士やったら、それはちゃんと間を埋めるような話をせえへんかったら、解消されへんはずやのに、それを全部受け入れろみたいな風潮であるっていうのは、多分僕自身は変やなと思ってて。

このインタビュイーは民間企業に勤務した経験を持ち、「みんな（健常者：注）と同じようにできるように努力をして」きたという。あるとき、「行き詰まって、自分ではもうなんとも解決でき」なくなったが、CIL の理念に出会い、「救われた」と感じたという。しかし、「しばらく経ってきて自分のある一定のしんどさみたいなものが解消されてくると」、CIL の主張に「歪な感覚」を覚えるようになったとも述べた。その感覚を招来するもののひとつが、「障害者であることをありのまま受け入れよ」という規範である。この規範が、対話や交渉なしに他者へ差し向けられることに、インタビュイーは違和感を覚えていた。

また、このインタビュイーは、「障害受容」が十分にできていないと自己分析し、介助者を積極的に活用するように生活を変えるべく努力していた。それというのも、介助者に適切な指示を出し、介助者を利用する術を体得していることが、CIL のロールモデルとして相応しいとされているためである。しかしながら、CIL で障害者のロールモデルになるということは、「上っ面で」演じられるような類のものでなく、障害当事者の生き方そのものにかかわってくる。そのあたりのことを、インタビュイーは次のように語っている。

その辺がわりとその、その人が生きてきた過程だったりとか、…生きざまみたいなものが、もろ出るじゃないですか。多分お仕事だけの話でね、やったら上っ面で話してすむ話なんですけど、…すごくこう、コアな自分の今までの感覚であったりとかに、すごく近づくから…

ここに、期待される当事者像と対峙することは、とりもなおさず自分の中核に触れる問題であることが示されている。期待される障害者像／当事者像とは、「障害受容」できている障害者にほかならない。実は、この「障害受容」については、CIL の障害当事者の間にもさまざまな意見がある。たとえば、ある CIL のニュースレターでは、障害受容をめぐって障害当事者が次のように述べている。

スタッフ自身が障害受容ができていないということは、すなわち障害はあってはならないということでそれは障害者はダメな人間だということになってしまうでしょう。そんなことを考えている障害者が CIL スタッフで自立支援や地域移行などでいろいろな話をしても説得力がないし、「じゃああなたはどうなの」と言われた時に何も言い返すことができないと思います。（中略）施設にいる障害者や家族介護を何年も受けていていろいろな経験を奪われてきている障害者から CIL スタッフを見た時に、外見や中身も含めてかっこよく元気でいきいきしていないと私はダメだと思います。なぜなら CIL スタッフがロールモデルにならないといけないからです。

このような見方がある一方で、同じニュースレターの別の号では、「障害受容できていないことは少しもおかしいことではない」「[障害受容できていないからといって：注] 自分を見つめていないわけではない」といった意見も掲載されている。仲間同士という関係においては、障害受容することの難しさが比較的率直に語られるのかもしれない。しかしながら、対健常者文化という対抗的なコンテクストが前景化する場面では、「障害受容」をめぐるコンフリクトがあることそれ自体が隠されてしまうことも予想される。

次に、介助者の抱えるコンフリクトについて若干の検討を加えることとしたい。

（3）介助者の抱えるコンフリクト――声を封殺してしまうこと

本研究のインタビューで、CIL の介助者／健常者スタッフが、CIL の理念に忠実であろうとするあまり、しばしば身動きが取れなくなっている事実が浮かび上がってきた。CIL で介助の経験があるインタビュイーの語りから、介助者／健常者スタッフが行き詰まる際には、2 通りの原因があることが明らかになった。結論を先取りしていえば、その２つは、ともにコミュニケーションの不在や歪みに関連していた。すなわち、①障害者の側が、介助者の身体という資源を無限であると思い込むこと、②介助者自身が、障害者の指示に従って動くことを無条件に絶対視してしまうこと、である。この２つの思い込みが重なると、介助者は疲弊していく。1 点目について、介助者経験のあるインタビュイーは以下のように語った。

介助者っていうのは、どっか当事者から見たら、自分（介助者：注）たちはすごい体力もあるし、…まあその人（障害当事者：注）はターミネーターって言ってたんですけど、どっかこう、無尽蔵の体力があるっていうふうに思われるところがある…

こうした障害当事者の「思い込み」に、CIL の介助者たちの「思い込み」と「信念」が重なる。CIL の介助者は、自分たちの行う介助が、介護保険のようなマニュアル的なもので

はなく、「してあげる」という性格を持つものでもないことを理解している。さればこそ、「障害者の指示に基づいて」動かねばならないという意識が介助者に強く働き、実際に指示に従えないような場面に直面した時でも、「全部言葉を飲み込んでしまう」のだという。しかしながら、理想的な介助者であろうとして、言葉を飲みこんだのだとしても、それが積み重なると、結局は介助者を辞めざるを得なくなるところまで追い詰められてしまうことになる。元介助者のインタビュイーは、介助者が障害者の指示には絶対従わねばならないと思い込んで自らの声を封殺するのでなく、介助者自身が自分の状況を障害者に伝え、指示された行為を遂行できない場合にはその理由を説明し、具体的な代案を提示して障害者に依頼することの意義を語った。双方の「思い込み」によるコミュニケーションの不在や歪みを解消するためには、お互いに折り合いがつけられるところはどこなのかを話し合う場、すなわち互いの妥当要求が掲げられる場が必要なのだということであろう。

とはいうものの、介助に際して「介助者からの提案」も「あり」だということを強調すると、CIL の理念や、その文化的コンテクストと衝突する可能性が生じてくる。介助者の提案を聞くことは、障害者にとって「介助者の言い分を聞く」ことであり、そのことは「健常者の言い分を聞く」こと、すなわち「健常者に合わせる」ことにつながっていく。健常者中心主義、健常者中心の文化的価値に対抗する運動体でもある CIL において、介助者はこうした時、健常者を表象／代表するものとして捉えられてしまう。実際には、CIL の理念に賛同して介助者となっている彼ら／彼女らは、健常者文化の中核的な担い手ではなく、健常者一般の代表でもないのであるが。

まあ実際には、中身をよく見たらお互い変えてるんですけどね。相手に合わせて。当たり前ですけど。ただそれを、ある意味水面下でお互い帳尻つけてる分にはいいのかもしれないですけど、そういうふうに表面化させたときにすごい葛藤を生じさせるんじゃないかなと思うんです。

この語りは、実際の介助場面では、お互いが相手に合わせていたとしても、「合わせている」事実が公には語られないことを表している。コンフリクトは潜在化しているか、潜在化させられているのである。

インタビューでは、障害当事者のコンフリクトも介助者のそれも、いずれもが本人たちの内面の問題として語られていた。かかるコンフリクトが緩和されるには、対話が必須であることはもはや明らかであろう。CIL においては、従来、障害者／健常者が対立的に捉えられる傾向が強かったが、そうした文化的コンテクストが障害当事者にも介助者にもプレッシャーを与えているのであれば、障害者/健常者という枠を飛び越え、越境するコミュニケーションが求められるのではないだろうか。越境こそが CIL の活動を活性化させることにつながると考える。

以下では、視点を変え、「実践共同体」として CIL を捉えつつ、CIL への参加の様態を考察していくこととする。そこでも、越境は重要なキーワードとなるであろう。

（4）実践共同体としての CIL

本研究においてはインタビュイーたちによって CIL をめぐる語りが繰り広げられているが、本項では、ジーン・レイブとエティエンヌ・ウェンガーによる「実践共同体」(community of practice)や「正統的周辺参加」(legitimate peripheral participation)といった概念を用いること、すなわち、CIL を「実践共同体」としてとらえ、そこにおいて参加者が「正統的周辺参加」の過程を展開しているととらえることで、CIL における参加者がコンフリクトを体験しつつも共同体に参加し続ける様子を明らかにしたい。

レイブとウェンガーは、徒弟制のもとで弟子が知識や技術を身につける過程や AA（「アルコホーリクス・アノニマス」）のようなセルフヘルプ・グループのメンバーがグループにおいて知恵や生き方を身につける過程に着目した(Lave & Wenger 1991=1993)。レイブらによれば、そのような人びとは、実践者の共同体において、当初は、「周辺的参加」という形の参加形態をとる。その後、参加者は資源にアクセスし、同時に、親方・先輩、他の参加者などとの間のコンフリクトやパワーゲームに対処しながら、次第に「十全的参加」(full participation）という参加形態をとるようになるとされる。そのような過程が、「正統的周辺参加」の過程であり、それは決して静的な過程ではなく、動的な過程として描かれている。

（5）CIL の理念をめぐる語り

本研究におけるインタビュイーである B さん、Y さん、X さんが語っているのは、それぞれの人が、CIL という「実践共同体」において「十全的参加」に向かう過程であると考えられる。そして、語り手によって語りの内容が大きく異なることが見えてくる。とりわけ、B さんと X さんとでは大きく異なる。

B さん、X さんともに、CIL における学ぶ機会を利用して徐々に CIL の理念を身につけていった過程を語っている。

B さんは、運動に参加すること、運動の参加者から影響を受けることを通して徐々に CIL の理念を身につけていったことを語っている。また、X さんは CIL の協議会である

JIL の研修に参加して CIL の理念を学んだ。そして、とりわけ、「自分のせいじゃない」という考え方は X さんを救った。

一番大きかったのは自分のせいじゃないよって言われたのが一番大きかったかもしれないですね。

しかしながら、X さんの語りの内容と B さんの語りの内容とは大きく異なる。B さんの語りにおいては、事故にあい、寝たきりで引きこもっていた自分が、ヘルパーを使い、CIL と出会うことで考えを変え、社会変革を目指す運動に参加するようになった過程が語られている。一方、X さんの語りにおいて、CIL の理念に救われたり、共感できたことはあるが、それに違和感を感じたり、苦しかったということが多く語られた。「正統的周辺参加」という観点で考えると、B さんは「十全的参加」に向かっているように見え、X さんは「十全的参加」の過程から外れた位置に留まっているように見える。

もし実際にそうだとすれば、どのように X さんはそのような立ち位置に留まっているのだろう。

（6）「十全的参加」の過程から外れた位置に留まること

以下、X さんの語りおよび Y さんの語りより、どのように X さんが「十全的参加」の過程から外れた位置に立ち位置に留まっているのかを考えたい。

① 障がい者というカテゴリーにとらわれることからくる違和感

X さんの語りによれば、X さんは、CIL の理念を体現するような障がい者像にとらわれて苦しんでいた。加えて、X さんは、自分の当事者性という点では、障がい者であることよりも、他のことがらのほうが優勢であると考えている。

僕の当事者性ってそれでいって考えたら、障がい者っていう当事者性って、何かを語るっていう要素って、ほんまに痛い思いをしたとか、家族との関係だったりとかってそこくらいなんですよね。ほんまのしんどさがどうとかってそんなに出てこないんですよ。

そして、X さんは、身体障がいをもっているが、親が離婚した人、きょうだいが知的障がいをもっている人としてのほうが語ることがたくさんあるとしている。X さんは障がい者というカテゴリーについて以下のようにも語っている。

カテゴリでみるとすごいしんどいなって、どっかね。固有のものってあると思うんですよ。その、女性のしんどさって女性じゃないと分かりにくい部分ももちろんあるやろうし、その、透析してる人やったらね、その人、ってもちろんあるんやけれども、そういう括りにしてはあまりにも障がいって分野はでかすぎるんかなと。その中で抱えてる問題の、問題の要素っていうのもあまりにも多岐に渡りすぎて、しんどいんかなって。

以上より、X さんは障がい者というカテゴリーにとらわれることに違和感をもっており、自らを障がい者というカテゴリーの周縁部に位置づけているということができる。

②違和感を共有するネットワーク

そして、以上のような違和感は、本人が「十全的参加」の過程から外れた位置に留まることを難しくするだろう。なぜなら、違和感はやがて疎外感となり、共同体に所属し続けることが難しくなるからである。そこに留まるには、おそらくは、そのような違和感を他の人びとと共有することが必要であろう。

X さんがスタッフを務める CIL のスタッフである Y さんが、インタビュイーとして X さんと同じインタビューに参加していた。Y さんはいわゆる当事者スタッフではなかった。Y さんは、CIL の当事者スタッフとしての役割を期待された X さんが「すっごい何か自分の言葉じゃなくて、必死でやってる」姿を見て、疑問を感じるようになる。Y さんは以下のように述べている。

その役割を期待されること自体がしんどい当事者がいるんだなあ、とは、あの、初めて知りましたね。

そして、Y さんは自分自身の体験（不登校）と X さんの姿を重ねあわせ、共感している。Y さん自身が不登校の当事者というカテゴリーにとらわれることに違和感をもったという体験があり、そのような体験をもとに、X さんと「別に障がい受容とか頑張る障がい者っていうところじゃなくて」話せるようになった。

また、Y さんは、自らを、「障がい者」「健常者」という 2 つのカテゴリーのはざまを揺れ動く者としてとらえている。

感覚的には非常に当事者的なところもあったりとかするんで

だからそこをこう、そのジレンマみたいな、境界みたいな狭間をこう揺れる自分がいて

障がい者と健常者でこう対立した構造で、あのもう、なかなかこう相容れない時は、もうちょっとそこを行き来できるような、感じでやれるかなと思います。

以上の語りから、X さん、Y さんともに、「障がい者」「健常者」というカテゴリーを越境して生きる人びとだといえるだろう。そして、それぞれがとらわれているカテゴリーに違和感をもち、違和感を互いに共有することが可能であることがうかがえる。そのような共有から生じる共感が、おそらくは、お互いが共同体に留まり続けることを可能にしているのではないだろうか。さらに言えば、X さん、Y さんともに、そのようなカテゴリーにとらわれて生きることができなかった人びとなのかもしれない。カテゴリーに安住して生きることができない状況があり、越境せざるをえなかったということなのかもしれない。そのように考えれば、X さんと Y さんとの間に生じている共感は、切実さのうえに成り立っているものであるといえるだろう。X さんと Y さんとのつながりがもつそのような切実さが、2 人が「実践共同体」において「十全的参加」の過程から外れた位置に留まるための原動力となっているのかもしれない。

［参考文献］
Lave, J. & Wenger, E. (1991). Situated learning: Legitimated peripheral participation. New York: Cambridge University Press.
朝倉輝一（2004）『討議倫理学の意義と可能性』、法政大学出版局
［引用文献］
ＫＳＫＱピア大阪ニュースドリーム 27 号 2009.5
（ http://www.v-aid.org/check/peerosk/n_d27/syougaijuyou12.htm）2013.5.25 確認
ＫＳＫＱピア大阪ニュースドリーム 16 号 2007.10
（ http://www.v-aid.org/check/peerosk/n_d16/n_d16.pdf）2013.5.25 確認

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
①児島亜紀子「架橋する実践――ソーシャルワークの価値と倫理における『正義』および『ケア』をめぐって」、『社会問題研究』、査読無、61 巻、2012、15-28、
②児島亜紀子「ソーシャルワークとケアの倫理:その受容と理論的課題」、『社会問題研究』、査読無、60 巻、2011、1-13
③松田博幸、「精神障害当事者の手によるピアサポート・トレーニング・プログラムの開発：カナダ・オンタリオ州の OPDI Core Essentials Training Project の事例より」、『精神障害とリハビリテーション』、査読無（依頼論文）、Vol.15、No.2、2011、235-240

〔学会発表〕（計３件）
①田垣正晋「ナラティヴを媒介とした学際的研究」、日本心理学会第 76 回大会、2012.9.11～9.13、専修大学
②高城大、児島亜紀子「ポストモダン・ソーシャルワーク論の意義とその理論的課題について―権力論に焦点を当てて」関西社会福祉学会、2011.3.12、仏教大学
③松田博幸、「精神障害をもつ当事者によって生み出された支援ツールの開発過程およびその背景：北米における Emotional CPR および OPDI Peer Support Toolkit を例として」、日本社会福祉学会第 58 回秋季大会、2010.10.10、日本福祉大学

〔図書〕（計６件）
①星野晴彦、澁谷昌史、粟野明子、伊藤嘉代子、児島亜紀子他、明石書店、『Q&A でわかるソーシャルワーク実践』、2012、10-23
②松田博幸、「当事者性をめぐる自己エスノグラフィーの試み」、日本社会福祉学会 編、『ソーシャルワークの思想　対論社会福祉学 4』、中央法規、2012、217-244
③松田博幸、「『支援者』自身との『協働』：支援者が協働するために」、山野則子, 他 編、『教育福祉学への招待』、せせらぎ出版、2012、179-195

〔その他〕
ホームページ等
National Empowerment Center の資料の翻訳を収録したホームページ
http://www.sw.osakafu-u.ac.jp/~matsuda/mentalhealthliteratures.htm

６．研究組織
(1)研究代表者
児島　亜紀子（KOJIMA　AKIKO）
大阪府立大学･人間社会学部･教授
研究者番号：40298401
(2)研究分担者
松田　博幸（MATSUDA　HIROYUKI）
大阪府立大学･人間社会学部・准教授
研究者番号：30288500
(3)連携研究者
田垣正晋（ TAGAKI MASAKUNI）
大阪府立大学･人間社会学部･准教授
研究者番号：30347512